

令和4年度 第2回教育課程編成委員会

日 時：令和4年3月24日（金）20：00～21：00

場 所：長崎医療技術専門学校 会議室

出席者：長尾 博，松本逸郎，西 啓太，有福浩二，大坪 建

分部哲秋，韋 傳春，岩永隆之，早野和之，林勇一郎，荒木一博

欠席者：なし

司 会：韋 傳春

1. 校長挨拶

国家試験合格発表の結果について ※（ ）内は全国

PT：新卒 88.6%(94.9%)，全体 90.5%(87.4%)，既卒者は全員合格

OT：新卒 100.0%(91.3%)，全体 89.5%(83.8%)

入学者の状況

最終的に理学療法学科 46 名，作業療法学科 32 名入学予定となった。

2. 出席者紹介

3. 開会

当委員会第6条の規定による出席数を満たしており本委員会は適切に成立していることを確認する。

4. 委員長選出

委員長は，分部哲秋校長で進めさせて頂く。

5. 前回会議後の報告

今年度は全て対面授業で実施できた。

前回話題にあがった休学，退学者の傾向と対策については，アドバイスいただいたことを参考に，実施した結果を今回の審議事項にさせていただいた。

6. 審議事項

『成績不良者に対する関わりについて』

林 ）前回の委員会でも取り上げた内容の継続した報告になるが，成績不良者に対してどのように取り組んできたかと今後の取り組みについて反省も踏まえて話をさせていただく。過去4年間の休学者と退学者の推移をまとめてみた。今年度は3学年合わせて退学者が15名，休学者が3名の計18名であった。同じように令和3年度が12名，令和2年度が15名，平成31年度が8名であった。今回国家試験を受けた学生が入学してきた年度から休学者や退学者が増加してきている傾向がある。そのうち令和4年度や3年度に関して1年生は8名と9名が退学しており，さらにその中の4名と6名が前期のうちに退学や休学を決断している。令和2年度に関しては9名中2名が前期中に退学であったことを踏まえると，過去2年はいきなり辞めてしまう傾向が強かった。

2020年度から2022年度の1年次の定期試験の素点の平均点を比較してみると，2020年度は平均が80～85点の集中している傾向がある中で，真ん中があまりおらず，成績がずば抜けて悪いものが少しいる。このことは前回の会議でも二極化している現象が見られていると報告している。2021年度の傾向は，成績の高いものもいるが，真ん中のところが増えつつ，さらに極端に悪い人が増えている。平均で45点以下を下回るものもいる。2022年度に関してはさらに成績の良い学生が減ってき

て、中間より成績の悪い層やさらに悪いものが増えている。成績が優秀な割合が減り、手がかかる学生の割合が増えている。平均点でみると2020年は74.0点に対して過去2年で67点台に落ちてきている。本校の成績のA、B、C、Dに置き換えて割合みると令和2年度（現3年生が1年生の時）はAやB評定をもらう学生が4割以上を占めていたが、昨年度と今年度はAの割合は減り、BやC、Dの割合が増えており、再試験を受ける学生も増えている。しかし再試験が一番多かったのは2021年度であり2022年度は減っているが、その理由は試験問題の難易度が下がっているのではないかと考えられる。さらに問題の難易度は下がり、成績も下がっていることを考えると学習の未熟度が高くなっていることが考えられる。

今年度の対策として医療基礎の中で解剖学補習を取り入れたり、複数の教員で関わったり、入学前からオリエンテーションでの模擬授業を入れて学習のイメージをつけるということをやってみた。しかし効果としては成績不良者よりも、学習方法に少しだけ悩んでいる学生には効果的だったようである。成績不良者には今後はマンツーマンに近い環境を如何に多くしていくかが重要であると思う。「いつでも対応できるよ」という構え方ではなかなか追いつかないということが今回の反省であった。

環境づくりに関しては資料に示す1から6までを設定して臨んだ。学生との関りを多くするために週1回のクリーンデイなどでの関わりも大事にした。面談可能な部屋も増やして確保した。4限目終了したあとのオフィスアワーも設定していつでも相談できるような対応を整えた。活動班での関りを深めるような対応もするようにしていたが、1年生の対応の密度よりもどうしても実習に関わる学年や3年生の国家試験対策という面に重点が偏っていた傾向があったと感じている。

次年度に向けての対策としては長期目標としては徹底的に学習習慣と学習方法をしっかり獲得できるようなことを目標にして目指して関わっていこうと考えている。具体的には3学年全て均等に関わるというよりも初学年度である1年生に対して中心に教育体制を整えていくことを考えている。補習に対しても1年生の科目を主に実施し、参加は全学年受け入れるような方法で実施していきたい。基礎科目はどちらにしても3年生でも必要になってくるため価値はある。また補習を通して学生間のつながりを促しつつ成績不良者への対応ができれば良い。教員の姿勢においても「いつでもいいよ」という待つ姿勢ではなく、こちらから積極的に関わるような姿勢になっていこうと考えている。さらに定期試験の日程などに必ず補習として、試験の振り返りを実施する期間を時間割に設定しようと考えている。また活動班が各学年で最大6班あるが、小グループ制で授業の振り返りをipadやノートを活用して教員が確認し、常に学生の学習状況を把握していこうということも考えている。このように視点を絞って実施していくことで効果を目指したい。効果や働き方改革がそれでうまくいくのかはわからないが、先生方のご意見を頂きながら次年度の対策をしっかりやれるような機会になればと思う。

長尾) 退学者の主な理由は何か？

林) 傾向としては成績不良や意欲の問題、他に体調不良、経済的理由があるが、成績不良が引き金になっているケースは多いと思う。

松本) 先生方の印象として辞めた各学生の理由は把握されていたのか。

林) 怪しい学生については担任や活動班で担当する教員などで対応していた。必要に応じて保護者への連絡もしていた中で退学に至っている。ほとんどは予測して対応していた。また入試の時点から心

配していた学生が退学になったケースもある。難しい学力であっても引き上げていかないといけない時代になってきていることもあり、初学年時に徹底的に学習面での支援を考えていく必要があると考えている。

松本) 対応はなかなか難しいと思うが、初学年で対応することは方法論としては正しいと思う。

韋) 面談や補習もしている中で結果的に増えてしまっている。入試で選抜できない状況下で仕方ない面はあるが、どうにか対策を講じなければならない。

松本) 早い時期に退学に至るものは、ある意味では入学前からいろんな課題を持っていると考えられるため、初学年時に力を入れて学生との接触時間や関係の距離を縮めることは非常に理にかなっている。授業の印象であるが、今年の1年生は非常に反応がわかり難かった。学生との距離感も遠かった。クラスの雰囲気も随分違っていた。

林) 作業療法学科には社会人経験者が数名いたが、理学療法学科は現役生のためのクラスであった。リーダーシップを取る学生がおらずまとまり難い特徴があった。前期の初めの方は無反応であった。

松本) 授業後に質問に来る学生は極端に少なく、学生の気質を掴めなかった。

林) 私たち常勤教員に対しても質問に来る学生は年々少なくなってきている。教員との距離が開いている印象がある。

松本) そのあたりが高校時代にコロナ感染による影響を受けた弊害なのかもしれない。しばらくはそのような学生が入ってくることを前提に考えていかないといけない。

長尾) 経営上はある程度の退学者がでることも考えた運営が必要である。在学の学生をどのようにして成績を伸ばすのかという視点も持たないといけない。成績不振には「動機づけのなさ」「基礎学力の低下」「学習方法がわからない」がある。この3つを論議して対策を考えていかなければならない。学習方法については弱点を見つけて強化する方法がある。また動機づけに対しては、それを行うことでのメリットや結果を示すことが必要であり学生にセラピストなるメリットを強く伝えていく必要がある。難しい問題は基礎学力である。この3点を絞って対策を考えていくと良い。

大坪) 成績が下がった理由にはコロナ禍のオンライン授業等で他者とのつながりが薄くなったことが背景にある中で、今後は対面授業やイベント、個人間での交流が進み予想としては元に戻っていくのかと思っている。スライドに示された定期試験の平均点の低下は他校でも同じような状況なのか。

林) 他校の成績については国家試験の合格率をみるしかないが、今年度の国家試験をみた時に例年に比べ難易度が低かった。その中で合格率が9割に満たないという現象が、全体的に学生の学力が下がってきてる傾向にあるのではないかと捉えている。

林) 学習効果という視点でみると、教員が良い授業をすればよいということだけではなく、年齢が近く、手を伸ばせば届きそうな目標の方が教えた方が学習効果が高いという研究データでもある。そう考えると学校に来ていろんなイベントを通して先輩達と関わることで、学習方法を吸収しやすくし、学力にも繋がるかなと思う。講習も僕らが良い授業をするよりも学習する機会とちょっとした方法を教えるだけで、できるだけ能動性を潰さないようにしたい。臨床実習の効果も1,2年目のセラピストが教えたほうが実習生は吸収度が高いというデータが出てるので、一般的な学習も同様であると考えている。そういう機会を増やすと、もしかして次年度はもう少し良い結果を出せるのではないかと期待している。

大坪) 臨床の新人教育でも参考になると思う。

有福) 教員がマンツーマンで個別指導する課題としてマンパワー不足の問題があるため、先程話に挙げた学生同士を上手くつなげることは非常に良いと思う。私も国家試験勉強の時に 100 点じゃなくて 6 割が全員取れたらいいねっていう考え方で学生同士協力して勉強していたので、そのような方法が全体の学力を引き上げられるのではないかと思う。

松本) 定期試験の難易度を下げいかざるを得ない中で、先生方が面談や補習などで学生との接触頻度を増やし、その結果、国家試験で高い合格率を出せているのは大健闘であると思う。別な書籍で読んだが離島での複式学級は密着度も高く学力を落とす原因でないことを知った。初学年時に力を入れて距離と時間を注ぐことは正しいと感じる。

7. 総評

校長) 休学者や退学者を少しでも減らせるよう初学年時に力を入れていきたい。また出来るだけマンツーマンに関わる機会も作っていききたい。今後ともご指導をお願いしたい。

8. 謝辞

校長) 出された様々なご意見を参考に改善していきたい。

9. 閉会

韋) これを持ちまして第 2 回教育課程編成委員会を閉会する。

次回の教育課程編成委員会は令和 5 年 9 月 29 日 (金) 20 : 00 を予定する。